神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

The Outline of New Guinea Pidgin

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1976-06-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中野, 道雄, Nakano, Michio メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2275

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

「ニューギニア・ピジンの輪郭」

中 野 道 雄

0．本稿の目的は，パプア・ニューギニア(Papua New Guinea)のリンガ・フランカ(lingua franca)の一つとして知られているニューギニア・ピジン(New Guinea Pidgin)について，その歴史と現状，および，その統語法における特徴の一，二を概観することにある。しかし，ニューギニア・ピジンを含む，いわゆるピジン・クレオール(pidgin and creole languages)の研究においては，その専攻者の間においても，術語の定義が一致しているとはいえないので，まず，若干の術語を検討することからはじめなければならない。

1．1．最初に，リンガ・フランカ(lingua franca)という語を検討しよう。この語は，中世における十字軍の遠征に伴なっておこった西欧人とレバント地方の住民との接触において用いられるようになったとされるthe Lingua Francaを普通名詞化したものであって，ピジン・クレオール研究の権威ホール教授によって次のように定義されている。

「他に共通の言語を有しない人々の間でコミュニケーションの手段として用いられる言語である。(その構造的特徴や社会的地位は問わない。)」[1]

(1) Hall (1966), p. xii.

しかし，この定義は，以下に指摘する理由で，次の西江雅之氏のもののほうがまさっている。

「異なった母語(mother tongue)をもつ二つ以上の集団の人々が，たがいの意志伝達を容易にするために習慣的に使用している〝ある言語〟である。」[(2)]

ここで,「習慣的に使用している」という規定が重要である。これによって，たとえば，たまたま，飛行機に乗りあわせた日本人とドイツ人が，英語で話したとして，その場合の英語を，リンガ・フランカと呼ぶ必要がなくなる。そのことを明確にしたほうがよいのは，事実上，リンガ・フランカの名で呼ばれているのは，上例の英語のごとき場合ではなく，ある程度，持続的な言語接触(contact of languages)の状況において，習慣的(habitually),制度的(institutionally)に用いられている言語であるからである。

典型的なリンガ・フランカとしては，歴史的存在のthe Lingua Franca，国連の公用語，インドにおける公用語としての英語，エスペラントのような人工国際語，東アフリカのクレオールであるスワヒリ語，パプア・ニューギニアのピジンで，本稿の対象であるニューギニア・ピジン，などがある。

なお，西江氏の定義の〝ある言語〟というのは，より明言的にいえば，一箇の独立した言語，ということであるので，たとえばbusiness Englishは，リンガ・フランカではない。

また，公用語は，当然リンガ・フランカであって，公的な場面（裁判，行政，教育，議会，掲示，標識など）において，制度的に用いられるもの，ということができる。

リンガ・フランカの訳語として,(「リンガ・フランカ」のままでよいと思うが,)「共通語」「通用語」などが行なわれている。しかし,「共通語」は，すでに，国語学において,(標準語に対して,)方言間の「共通語」の意味で用

(2) 西江 (1975), p. 10.

いられているので，異言語間のものは,「通用語」のほうがよいかもしれない。

1．2．前掲の，飛行機に乗りあわせた日本人とドイツ人が，日本語とドイツ語をとりまぜて，そのどちらともつかない，まにあわせのことばを用いて，コミュニケーションを行なったとする。このときのことばは，その場合の必要に応じて，仮造りされたものであって，安定した構造をもったものではないであろう。このようなものを，イエスペルセンはmakeshift languageと呼んでいる。(3)

一方，marginal languageは，ピジンとクレオールをあわせたものの名称である。ここでmarginal (境界的) というのは，ピジンやクレオールが，言語接触の結果として，それに関与した複数の言語から強い影響を受けながら生成された言語であるからである。ここで，注意すべきことは，ピジン・クレオールはmakeshift languageではないということである。すなわち，ピジン・クレオールの話者は，恣意的な，まにあわせ的な言語使用をしているのではなく，その言語自体の自律的な規範にしたがって言語使用を行なっているのである。

なお，ナガラは，このmakeshift languageとmarginal languageを入れかえて使うことを提唱している(4)が，語の本来の意味からして，上述のほうでもいいように思う。

もう一つ注意すべきことは，ピジンは，混成語または混合語(mixed language) などと呼ばれることがあるが，専門家の間では，最近においては，避けられるようになっている。それは，この語が，ピジンが,makeshift languageであるという通俗的誤解を招きやすいということと，混合という概念が言語学的にあいまいであり，さらにピジンにおける既成言語からの影響関係が，どのようなものであるか，まだ充分に明らかになっていないからである。

(3) Jespersen (1922), p. 232.
(4) Nagara (1972), pp. 275-6.

いかなる言語でも，少なくとも語彙の出自においては，混合的であることは，よく知られた事実である。たとえば，日本語の場合,「和語36.7%，漢語47.5%，外来語9.8%，混種語6.0%」となっている。[5]一方，ピジンは，この点で，一般に考えられているほど，混合的ではなく，トッドは，「その語彙のほとんどは，接触した言語のうちのひとつから受けついでいる」[6]としている。事実，ニューギニア・ピジンの場合,「英語75－80%，現地語（主としてトライ（Tolai）語）15－20%，その他（主としてドイツ語）5%）」[7]とされている。

ピジンとクレオールは，その生成を，言語接触に負うているが，言語接触といっても，前述の飛行機中のような場合でなく，植民地的状況における，主として，西欧語（英語，フランス語，ポルトガル語など）と現地語の接触であることは，だいたい一般認識のとおりだが，さらに，重要なピジンは，現地語の多言語地域において生じているとされている。

ピジンとクレオールの違いは,ピジンが世代交代によって，それを母国語とするもの(native speaker)を獲得したとき，それを，クレオールと呼ぶということになっている。したがって,「ピジンの話者は必ず別に母語をもち，日常生活は，その母語で行ない，ピジンは生活の一部でのみ使用する。したがってピジンの単語数は，それを話す人の母語の単語数よりはるかに少ないのが普通である。」[8]一方，クレオールは，一言語社会の母国語として当然ながら，語彙数は拡大する。結局，通常の言語とクレオールの違いは，クレオールが，至近の世代において，ピジンであった言語である，ということをおいてないことになる。

ピジンの統語法は，接触した言語のそれを反映している部分もあるが，そ

---

(5) 岩淵悦太郎「現代日本語」(1970，筑摩書房)，p. 81.

(6) Todd (1974), p. 2.

(7) Dutton (1973), "Preface" by S. A Wurm.

(8) 西江 (1975), p. 10.

れぞれのピジンの，あるいは多くのピジンに共通した，独自のものもある。通俗的には，ピジンの統語法は，簡単である，とされるが，一概に，そうといいきれないところがある。たとえば，ニューギニア・ピジンでは，時制が，文法的カテゴリーとしては，ないが，これはある程度，中国語でも，また，日本語でも同じである。また，英語の代名詞，he, she, itが，em の一つに簡単化している一方で，英語で，we一つで表わされる inclusive *we*とexclusive *we* が，*yumi*と*mipela*のように，区別される。

ただ，機能語や文法的仕組み(grammatical device)の多くが，屈折性を失なった形で，英語から入っているので，見かけ上簡単化している，と見えるのにすぎない，と思われる。

ピジンの音声(phonology)は，当然予想されることだが，現地語の音声の影響をより強く受けるのがふつうである。

次に，トッドは，ピジンをrestricted pidgin と extended pidgin にわけているが，[9] この区別は重要である。前者は，先にも引用したことばに見られる，「話者は必ず別に母語をもち，日常生活は，その母語で行ない，ピジンは生活の一部でのみ使用する」タイプの，限定性の強いピジンであり，後者は，別に母国語を有するものの，日常生活の大部分で使用したり，母国語と重層的あるいは相補的に使用したりするもので，したがって，ピジンの流暢度，構造的安定性は，ほとんどクレオールの同じようなタイプのもののことである。このことは，いいかえれば，ピジン→クレオールという発展過程は必然のものでなく，ピジンが，それを母国語とする言語社会を有しないままに，言語として，相当に発達する場合もある，ということである。本稿の対象である，ニューギニア・ピジンは，そのような場合ではないか，と考えられる。

2．1．ニューギニア・ピジンという名称は，このことばが，パプア・ニ

(9) Todd (1974), pp.5-6.

ューギニアのうち，いわゆるニューギニア地域（ニューギニアの東北部とニュー・ブリテン島などの附近の島を含み，旧ドイツ領，続いて，オーストラリアの国連信託統治領となった地域）において，定着し，発達したためである。しかし今日では，パプア地域（首都ポート・モレスビーを含む東南部）にも，拡がっており，パプア・ニューギニア全体のリンガ・フランカとしての性格を強めつつある。さらに，ニュー・ヘブライズ島などで行なわれているピジンも，パプア・ニューギニアのピジンと方言的差異しかなく，将来，広くメラネシア地域において，これらのピジンの統合された形のものが，リンガ・フランカとして行なわれる可能性がある。メラネシアン・ピジン(Melanesian Pidgin)という名は，このような展望のもとに,Mihalic(1971)において用いられている名である。現在のところ，地域冠称としては,「メラネシアン」は大きすぎ,「ニューギニア」は小さすぎる感じである。「パプア・ニューギニア」は，この意味で，適当だが,「パプア・ニューギニア・ピジン」というのは長すぎるためか，行なわれていない。「ネオ・メラネシアン」(Neo-Melanesian)は，英語における，pidginという語につきまとっているderogatory senseを切り捨てるために，ホール教授によって提唱され，ある程度行なわれている名称である。しかし，メラネシアン・ピジンにおいては，その言語の自称はpisinであって，パプア・ニューギニア人自身は，この語を侮べつ的なものと受けとっていないようである。また，術語としても，前述のように定着している。したがって，pidginという語を避けるよりも，その誤解をといて，正しい意味を確立していくほうが適当であるように思われる。

以上，要するに，術語としては,「メラネシアン・ピジン」または「ニューギニア・ピジン」が行なわれている。一般の用語として，地域指定が自明のときは,(たとえば，パプア・ニューギニアの中で，英語で，この言語に言及するときは）Pidginであり，先述のように，その言語自体では，PisinまたはTok Pisinである。(本稿では以下,「ピジン」で,「ニューギニア・ピジン」を

指し，“pidgin”で,「ピジン語一般」を指すことにする。）なおpidgin Englishという呼称は術語としては，現在，あまり行なわれていない。これは，Englishの一変種という印象を与えやすいが，そうでないこと，また，ピジンにおいても，単にpisinというほうがふつうであることからみても,この名称は，適切でないからである。

2．2．ピジンが，リンガ・フランカとして発達をとげた舞台であるパプア・ニューギニアの歴史について，簡単にふれておこう。

ニューギニア島は，16世紀にポルトガル人によって発見された。列強による植民地化は比較的おくれて，19世紀に，西半分がオランダ領に，ドイツが東北部とニュー・ブリテン島などの島嶼，イギリスが東南部と分割した。20世紀はじめに，イギリスは，自領をオーストラリアに与えた。また，第一次世界大戦中に，オーストラリアは，ドイツ領を占領し，戦後，国際連盟から，信託統治を認められた。すなわち，オーストラリアは，旧ドイツ領をthe Mandated Territory of New Guineaとして，また旧英領をthe Territory of Papuaとして統治したのである。前者は，第二次世界大戦中，日本軍が一時占領したが，大戦後，オーストラリアは，改めて，国際連合から信託統治を認められた。ここで，注意すべきことは,「パプア」と「ニューギニア」は，同じ島につけられた別の名であったのだが，上述の経過によって，別の地域を指す習慣ができたことである。

第二次世界大戦後，オーストラリアは，パプアとニューギニアの行政の一体化と，住民による自治をすすめ（後者については，国際世論にうながされて），1973年に，パプア・ニューギニア人による自治政府が樹立され，1975年9月に，英連邦の一国として，独立したのである。

この国は，第二次大戦中，先述のように，日本軍が戦場としたところであり，現在は，通商の相手として，相互に重要な相手となっていることは周知のとおりである。

なお，旧オランダ領は，第二次大戦後，インドネシア領（西イリアン）となっていて，その言語事情は，国際的学界には余り知られてなく，ピジン研究においても，一応，対象からはずされている。

2．3．次に，パプア・ニューギニアの言語事情を見てみよう。この国は，世界でも，多言語国家の最たるもので，オーストラリア国立大学のワーム教授によれば，（独立した言語か方言かという認定に疑点のあるケースも若干あるが，）パプア・ニューギニアの言語の数は約750である。[10]それらの言語は，二大別されて，その一つは，メラネシア諸語である。これは，マレイ・ポリネシア諸語(Malayo-Polynesian languages)[11]の一派をなしている。もう一つは，パプア諸語である。パプア諸語は，（相互に系統的つながりがあるかどうかに問題があるという意味で，）ニューギニア島で話されている非オーストロネシア語(Non-Austronesian languages)，省略して，NAN語と呼ぶ習慣がある。しかしワーム教授は，最近の研究で，パプア諸語は，相互に関連している4つのグループに別かれ，それらは，それぞれの内部ではもちもんのこと，グループどうしでも，たがいに関連しあった言語であることが明らかになった，としている。[12]したがって，パプア諸語という名称も，妥当性がなくはないわけである。いずれにしても，二百数十万の人口で，750の言語があり，そのもっとも大きな言語の人口でも10万以下であるという事情は特異なものであり，リンガ・フランカが行なわれることは必然とさえいえるのである。

2．4．以上の事情が原因となってこの国で行なわれているリンガ・フランカに3つの言語がある。その中で，もっとも広く行なわれ，その有力さを，

---

(10) Wurm (1973), p.1.

(11) Austronesian languagesともいう。

(12) Wurm (1973), p.2.

近年ますます増してきているのが，ピジンであるわけであるが，他に，英語とPolice Motu (Hiri Motu) がある。英語が用いられるのは，宗主国の言語であったからであるが，高等教育，行政文書，観光関係などで用いられている程度で，一般民衆の間での普及度は，きわめて低い。なお，当然のことながら，同国で行なわれている英語はオーストラリア英語である。たとえば，ピジンの語彙として，使われている *bus* (<bush) は「やぶ・しげみ」などの通常の意味の他に，"any area outside the village or gardening limits" があるが[13]，これは明らかに，オーストラリア英語の影響である。

過去において，国際的流通性，文化性が格段に高い英語を，流通させ，国語にしょうとする行政的・教育的努力がなされてきたし，1950年代に派遣された国連の調査団は，ピジンでなく英語を将来の公用語とするべきであるむねの勧告を行なった。[14]しかし，現在でも，上述の状態である。筆者が，1975年3月に，ポート・モレスビーの議会を訪ずれたときにも，会議そのものの用語は，ピジンが圧倒的であるが，その記録文書は，英語に翻訳して保存・配布されていた。今後，ピジンと英語の関係は，このような関係で続く可能性が高い。

Police Motuは，パプア地区の部族であるモツ族の言語であるモツ語のpidgin化したもので，西欧語がsource languagsでない例外的pidginの一つである。首都地方では，今日でもかなり行なわれているが，他の地方での流通性は，きわめて低い。

モツ族のモツ語，チンブー(Chimbu)族のチンブー語などは，部族自体の有力さのため，部族以外の人たちによっても話されるが，やはり，地域的限定性が強く，パプア・ニューギニア全体のリンガ・フランカになる可能性は

(13) Mihalic (1971), s.v.bus.
(14) Wolfers (1971), pp.413-4.

ほとんどないと見られている。[15]

2．5．ここで，ピジンの発生と展開について，定説とされているものを紹介しておこう。しかし，ピジンは，本質的に，話しことばであり，わずか100年たらずの歴史とはいえ，記録があるわけでなく，語彙,構造,関連する歴史などからの推定であり；しかも，その研究は充分に進んでいるとはいえない。

定説によれば，ピジンの系統は次のようになる。[16]

…Chinese Pidgin (English)— Beach-la-Mar ┬ New Guinea Pidgin
└ New Hebrides Pidgin

ビーチ・ラ・マー(<Fr. bêche-de-mer) は，19世紀に，南太平洋から，白檀やナマコを入手するために，やってきた交易商人や船乗りが，現地人とのコミュニケーションに用いたことばである。

一方，1847年から，1902年まで，オーストラリアの北クイーンズランドで，さとうきび農園の年季労働が行なわれたが，南太平洋の各島から集まった労働者の間のリンガ・フランカとして，ビーチ・ラ・マーが用いられ，成長，変化した。

労働者たちは，このリンガ・フランカを，それぞれの故郷にもちかえったが，その中で，ラバウルを中心としたニューギニア地区において，もっとも強く根づき，それがさらに発展したものが，今日のピジンである。

ここで，注意すべきことは，pidgin が用いられはじめ，さらに発達するためには，要件がいくつかあるということである。まず，多言語状況である。上記の南太平洋島嶋での交易，オーストラリアでのプランテーションは，いずれもその典型的状況であるといえよう。また，プランテーションから，労

(15) Cf. Wurm (1973).

(16) Hall (1966), Chapter 1 &Dutton (1973), "Preface" by S.A. Wurm.

働者がピジンをを持ち帰った場合でも，その故郷が小さな島で，多言語地域でないときは，その土地で新しい生命を得ることはできない。次に，そのリンガ・フランカに一種のprestigeが付随していないときには，pidginを必要とする状況が消滅するとともに，やがて生命をおえることになるであろう。ニューギニアにおけるピジンは，限定された自分たちの村と外の世界を結ぶ糸として，より具体的には，公的な機関や白人の商店・家庭などに雇用されるための条件として，威信があったのであり，その状況は，今日のパプア・ニューギニアでも変わっていない。

第三に，リンガ・フランカを必要とする状況があれば，自然発生的にpidginが生じるのでなく，既に存在するpidginが用いられるようになる場合が多いということである。

2．6．要するに，ピジンは，言語学的にはextended pidginであり，パプア・ニューギニアが多言語地域であることと，それらが，一つの国にまで急速に成長したという歴史的状況から，民衆の間で，急速に，根づよくひろがった言語であるといえよう。

今後，国語または公用語として成長するかどうかについては，そのような決定においては，非言語学的要素も関係するので予測はできない。

クレオール化するかどうかは，興味ある問題である。ピジンを母国語とする世代についての報告もあるが[17]，なお充分な調査が必要である。しかし，パプア・ニューギニアは，今のところ，pidginがクレオール化するための典型的状況にはないことに注意すべきである。pidginのクレオール化は，西印度諸島，米国南部などの場合のように，母国語社会との完全な断絶によって起こるのが典型的である。今日のパプア・ニューギニアでは，都市社会は充分に発達していず，都市で働いているものも故郷から切りはなされているわけ

(17) Sankoff (1973).

ではない。ピジンが，extended pidginであるとしたのは，このような見方にもとづいている。

3．1．ピジンの統語的構造の共時的・系統的記述は，別稿においてすることにし，ここでは，二，三の例をもとに，言語の，系統的な，あるいは非系統的な影響関係とは，どのようなものかという問題について考察するいとにする。

先述のように，ピジンの語彙の75－80%は，英語に由来しているが，このことは，英語がピジンの系統的祖語であることを意味しないことはもちろん，語彙体系に限ってもそのようなことはいえない。このことを，ピジンの*no*，*nogat*の2語を例として考えてみよう。(以下，ピジンの例はイタリックにして，英語と区別する。)

*no*は，英語のnotないしは，noに由来し，次のように用いられる。

Yumi no ken lusim ting long dispela de.[18]
(We cannot forget this day.)

no kenはcannotであり，つまり，ピジンの*no*は，英語のnotに相当し，動詞・助動詞の前において（英語は後置），それを否定する機能語である。一方，*nogat*は，英語のno＋gotに由来し，次のように用いられる。

Yu no kam asde?——*Nogat* .
(Didn't you come yesterday?——Yes, I did.)

Yu no kam asde? —*Yesa.*

---

(18) 以下に用いるピジンの用例は，Mihalic (1971)，Dutton (1973)，*Wantok*（新聞）から借りている。

(Didn't you come yesterday? —No, I didn't.)

このように,否定疑問にこたえるときは,英語の場合と，イエス／ノーの撰択が逆転する。すなわち日本語と同じになる。

このように，これらの語の用法は，まったく非英語的といえよう。極端にいえば，英語は，ピジンの語彙の形式，記号の乗りもの(sign vehicle)の主たる供給源というのにすぎないことになる。

しかし，このことは，ピジンの意味構造や統語構造がメラネシア語のものそのままで，あるいは，それを機械的に簡略化したもので，それにただ，記号形式のおきかえを加えたものであるということも,またいえないであろう。第一，メラネシア語といっても，その実体は巨大な言語群であるのだから，ピジンとの関係をうんぬんするには慎重であらねばならない。

先述のように，ピジンの系統は，チャイニーズ・ピジンにまでさかのぼることができ，広大なメラネシア地域にわたって用いられながら形成したのであるから，その影響関係は相当複雑であることが予想される。ピジンは，近年に至るまで，文字に記録されることの少ない言語であったから，その歴史的研究は，ほとんど手がつけられていない。系統についての定説というものも，細部の実証を伴なったものではないわけである。

次に，ピジンの主要な統語的特徴である*i*について検討する。

Mi go.

(I go.)

Yu go.

(You go.) (singular)

Em i go.

(He (she, it) goes.)

Mipela (i) go.

(We go.) (exclusive)

Yumi go.

(We go.) (inclusive)

Yupela (i) go.

(You go.) (plural)

ol i go.

(They go.)[19]

このように，この語は，主語と述語の境界にあらわれる機能語である。1人称と2人称のそれぞれ単数および1人称複数の inclusive (you and me) では現われず，3人称では，かならず現われ，1人称複数のexclusive，2人称複数では，通常現われる。この語の機能は，その前後が主述関係にあることを示し，主語の人称・単複・inclusive／exclusive の別を，重複的に（主語自体に示されているから），全体を二分して（*i* の有無で）示すことであるわけである。

この語の出自は，it，is，him などの英語ではなく，メラネシア語であるとされている。Capell 教授によれば，メラネシア語には，主語と動詞の間にあって，主語の人称と数を示す小詞があり，その理論的再建形は次のとおりである。

sing.	1 *ya, *a	2 *(k)u	3 *i, *e
plur.	1 *incl.* *ta	2 *(k)wa	3 *si, *se
	excl. *ma		

また，これらは，1，2人称では，代名詞が省略されることがあるが，3

(19) Mihalic (1971), s.v. *i*.

人称では，名詞の場合でも，省略されないとしている。そして，ピジンの*i*は，この現われであるとしている。[20]

ピジンの場合を，同じ形で表にするならば，次のようになる。

sing.	1 ø	2 ø	3 *i*
plur.	1 *incl.* ø *excl.*(*i*)	2 (*i*)	3 *i*

ピジンにおいては，1人称，2人称であっても主語が省略されることは，通例ない。

この両表をくらべると，ピジンにおいてより単純である（変化形が少ないという意味で）わけだが，これが，pidgin化(pidginization)に伴なう一般的現象か，それとも，ピジンの形成に直接関与した特定のメラネシア語のそれを反映しているのかという問題がある。

また，メラネシア語一般にある，この小辞と主語たる代名詞そのものの数・人称の重複表示性が，1，2人称では，主語の省略という形でうすめられることもあるという事実と，ピジンにおいて1，2人称の一部で*i*が用いられないということとは，関係があるかどうか，また，それに，英語の主語をを省略しないという性質が影響を与えているかどうか，といった問題があるが，いずれも将来の課題である。

英語は，語彙の形式の主要な供給源である他に，表現型(mode of expression)においては大きな影響を与えていることは否定できない。

Sapos mi go, mi bambai givim long yu.
(If I go, I'll give it to you.)

---

(20) Capell (1969), pp. 49-50.

このように，sapos (suppose) を用いて，条件節と，それに呼応する主節を結び，条件，仮定などの表現をする形式，そしてそれを多用することは，おそらく，英語の影響であろう。ただし，その場合でも，英語との二言語使用(bilingualism) から，影響を受けたというより，そのような表現形式の欠如を，英語からの借用によって補った，あるいは，必ずしも欠如していたわけではないが，その論理的明確さを好んで，新しく採用して，広まった，というべきであろう。

4．ピジンの研究は，その実際的価値の他に，記述言語学的，社会言語学的，歴史言語学的にも，それぞれ興味あることを，この小論において示唆しえたとしたら幸いである。

次に掲げる参考文献表は，筆者，神戸外大研究所，同図書館のいずれかが所有する，ピジン・クレオール一般，およびニューギニア・ピジンに関する資料を明らかにしたものである。(包括的な文献表はReinecke, et al.(1975) によってえられる。) 特に重要なものには，コメントを付した。

BIBLIOGRAPHY

Bateson, Gregory. 1943. 'Pidgin English and Cross-Cultural Communication,' *Transactions of the New York Academy of Sciences,* II-6.

Bickerton, Derek. 1975. *Dynamics of a Creole System,* Cambridge Univ. Pr.

Brash, Elton. 1971. 'Tok Pilai, Tok Piksa na Tok Bokis (Imaginative Dimensions in Melanesian Pidgin),' *Kivung,* Ⅳ-1.

Capell, A. 1969. *A Survey of New Guinea Languages,* Sydney Univ. Pr.

Decamp, David. 1971. Introduction: The Study of Pidgin and Creole Languages,' Hymes (1971). 1968年の時点におけるピジン・クレオール研究の

展望。

Dillard, J.L. 1972. *Black English,* Vintage Books.

Dillard, J.L. 1975. *All-American English,* Random House.

Dutton, T.E. 1973. *Conversational New Guinea Pidgin,* Australian National University. もっともくわしいニューギニア・ピジンの入門書。

French, A. 1953. 'Pidgin Fnglish in New Guinea,' *Australian Quarterly,* XXIII.

French, A. 1955. 'A Linguistic Problem in Trust Territory,' *Eastern World,* Ⅳ.

Friederici, Von Georg. 1911. 'Pidgin-Englisch Deutsch-Neuguinea,' *Koloniale Rundschau.*

Guimarães, Newton Sabbá. 1969. 'A Study of Pidgin English,' *Journal do Comercio,* March (English translation by Joan McGuigan & John Murphy).

Gunther, John. 1969. 'More English, More Teachers!' *New Guinea,* June /July.

Hall, Jr., Robert A., 1966. *Pidgin and Creole Languages, Cornell* Univ. Pr.

ホール教授は，ピジン・クレオール一般およびニューギニア・ピジンに関して無数の論文を残しているが，この本にだいたいまとめられている。

Hooley, Bruce A. 1962. 'Transformations in Neo-Melanesian,' *Oceania,* XXXIII-2.

Hull, Brian. 1968. 'The Use of Pidgin in the House of Assembly,' *The Journal of the Papua and New Guinea Society,* II-1.

Hymes, Dell, ed. 1971. *Pidginization and Creolization of Languages, Proceedings of a conference held at the West Indies, Mona, Jamaica, April,* 1968., Cambridge Univ. Pr. 学会の記録で，難解だが必読書。

Inglis, K.S., ed. 1965. *The History of Melanesia, the 2nd Waigani Seminar,* The Research School of Pacific Studies & others.

Kleinecke, David. 1959. 'An Etymology for "Pidgin",' *International Journal*

of American Linguistics, XXV.

Laycock, Don. 1969. 'Pidgin's Progress,' *New Guinea,* Ⅳ-2.

Laycock, Don. 1970. *Materials in New Guinea Pidgin (Coastal and Lowlands),* Australian alian National Universit

Litteral, Robert. 1969. *A Programmed Course in New Guinea Pidgin,* Jacaranda Press.

Mihalic, F. 1969. *Introduction to New Guinea Pidgin,* Jacaranda Press.

Mihalic, F. 1971. *The Jacaranda Dictionary and Grammar of Melanesian Pidgin,* Jacaranda Press. もっとも信頼しうるピジンの辞書と文法書。

Mohlhausler, P. 1974. *Pidginization and Simplification of Language,* Australian National University.

Murphy, John J., 1966. *The Book of Pidgin English,* Revised Edition, W. R. Smith & Paterson.

Murphy, John J. 1973. *The Book of Pidgin English (Neo-Melanesian),* New Revised and Enlarged Edition, W. R. Smith & Paterson.

Nagara, Susumu, 1972. *Japanese Pidgin English in Hawaii, A Bilingual Description,* University of Hawaii Pr.

Ramson, W.S. 1970. *English Transplanted,* Australian National Univ. Pr.

Reineche, et al. 1975. *A Bibliography of Pidgin and Creole Languages,* University of Hawaii Pr.

Sadler, Wesley. 1973. *Untangled New Guinea Pidgin,* Kristen Pres.

Sadler, Wesley. 1974. *Tok Pisin, A Handbook for Writers,* University of Papua New Guinea.

Salisbury, Richard F. 1967. 'Pidgin's Respectable Past,' *New Guinea,* II-2.

Sankoff, Gillian and Suzanne Laberge. 1973. 'On the Acquisition of Native Speakers by a Language,' *Kivung,* Ⅵ-1.

Smith, Geoffrey. 1969. 'An Educational Balance Sheet,' *New Guinea,* Ⅳ-2.

Spears, Monroe K. 1975. 'American, Black, Creole, Pidgin, and Spanglish English (review to Dillard, 1975),' *The New York Review.*

Steinbauer, Friedrich. 1969. *Neo-Melanesian Dictionary,* Kristen Pres.

Taylor, Douglas. 1959. 'On Function Versus Form in "Non-Traditional" Languages,' *Word,* XV.

Taylor, Douglas. 1960. 'Language Shift or Changing Relationship? ' *International Journal of American Linguistics,* XXXⅣ-2.

Taylor, Douglas. 1963. 'The Origin of West Indian Creole Languages: Evidence from Grammatical Categories,' *American Anthropologist* LX.

Todd, Loreto. 1974. *Pidgins and Creoles,* Routledge & Paul.
比較的新しく，わかりやすい概説書。

Tudor, Judy. 1974. *Papua New Guinea Handbook,* 7th Edition, Pacific Publication.

Turner, G.W. 1960. *Written Pidgin English, Te Reo,* 3.

Turner, G.W. 1972. *The English Language in Australia and New Zealand,* Longman.

Wedgwood, C.H. 1954. 'The Problem of Pidgin in the Trust Territory of New Guinea,' *South Pacific,* January-February.

Weinreich, Uriel. 1958. 'On the Compatibility of Genetic Ralationship and Convergent Development,' *Word,* XⅣ.

Weinreich, Uriel. 1968. *Languages in Contact,* Mouton.

Wolfers, Edward. 1971. 'A Report on Ne-Melanesian,' Hymes (1971).

Wurm, S.A. &J. B. Harris. 1963. *Police Motu,* Australian National University.

Wurm, S.A. 1966. 'Pidgin—A National Language,' *New Guinea,* I-6.

Wurm, S.A. 1969. 'English, Pidgin and What Else? ' *New Guinea,* Ⅳ-2.

Wurm, S.A. 1971. *New Guinea Highlands Pidgin: Course Materials.* Australian National University.

Wurm, S.A. 'The Problem of a National Language in Papua New Guinea,' *Linguistic Communications,* 10, Monash University.

****

Reading Materials:

Wantok (a biweekly newspapers published by Wantok Publications). Subscribed.

Nius Bilong Yumi (a biweekly newspaper published by the Government of Papua New Guinea). Several back numbers only.

Various booklets on Christian topics by Kristen Pres.

Nupela Testamen (The New Testament), The Bible Society in Papua New Guinea.

Kakah Kais, ed. 1975. *Ol Stori i Kam long Ambunti, Wewak na Maprik* (folktales), Vol. I&II, Institute of Papua New Guinea Studies.

Luksave (serial booklets published by Australian National University).

No. 1. Man Bilong Niugini i Kamap Bisnisman

No. 2. Rigo Rot.

No. 3. Ol Senis i Wok long Kamap long Sindaun bilong of Nasioi Pipel

No. 4. Situm na Gobari

No. 5. Laip long Sinasina, Niugini Hailans

(日本の人類学者畑中幸子氏の論文のピジン訳。)

Tapes:

Conversational New Guinea Pidgin (for Dutton (1973)). 8 cassettes.

New Guinea Pidgin (for *Litteral* (1969)). 2 cassettes.

News items recorded from Australian Broadcasting Commission's shortwave radio broadcasts. Several cassettes.

Song Bilong Baibel. Kristen Kaset. 1 cassette.

****

The Carrier Pidgin, (a newsletter for pidginists and creolists, published by Social Science & Linguistics Institute, University of Hawaii).

****

畑中幸子 (1974)「われらチンブー」三笠書房。

岩佐嘉親 (1975)「新ニューギニア語入門」大陸書房。

川本崇雄 (1974)『日本語と南島諸語 (主としてメラネシア諸語) との語句構成

上の異同について』(「民族学研究」 XXXⅣ-2)。
村山七郎・大林太良 (1973)「日本語の起源」弘文堂。
西江雅之 (1975)『共通語，ピジン・クレオール』(「言語」Ⅳ-8)。

〖この論文は，神戸市外国語大学の研究プロジェクト「現代と国際環境」のうち,「英語圏における言語の流れ」班，および,「ネオ・メラネシア語」班の合同研究の一環として執筆された。筆者は，この研究をすすめるにあたって，1975年3月から4月にかけて，オーストラリアおよびパプア・ニューギニアに調査旅行を行なう機会を与えられたが，その際，佐藤昭義氏，村尾育英会，カンタス航空大阪支店，各位の御援助をえたことを記して，感謝のしるしとしたい。〗